

メアリ・シェリーの短編 「イタリアのことをあれこれ思い起せば」の翻訳

池 田 景 子

1. はじめに

メアリ・シェリー（Mary Shelley）の作品の中で最も知名度の高いものは、小説『フランケンシュタイン（*Frankenstein*）』（1818年）である。確かに、『フランケンシュタイン』はメアリの代表作としてその地位を確立し、批評家の注目を集めてきた。メアリは『フランケンシュタイン』以降、6作の中編および長編小説に加え、旅行記、ギリシア神話を題材にした詩劇、偉人伝、そして24作にも上る短編物語や記事を執筆している。さらに、晩年は亡き夫のパーシー・ビュッシュ・シェリー（Percy Bysshe Shelley）の作品編纂にも携わっている。これほど多岐のジャンルに渡る作家活動であるにも拘わらず、『フランケンシュタイン』以外の作品は看過されてきた印象が否めない。本稿ではメアリ・シェリーの短編記事「イタリアのことをあれこれ思い起せば（*Recollections of Italy*）」について簡単に紹介し、テキストの翻訳をする。なお、本稿は翻訳資料という体裁を取っているため、作品中に登場する地名や文学作品などについて簡略な注を付している。この注の付し方については論考における注釈とは異なることを申し添えておきたい。

2. テキストについて

リー・ハント (Leigh Hunt) 宛の書簡によると、メアリは1823年10月5日に雑誌「ロンドン・マガジン (*London Magazine*)」に掲載予定の記事を執筆していたという (*MSL*, I 393)。その後、本短編は1824年1月号の同誌第9巻に匿名で「イタリアのことをあれこれ思い起こせば」が出版される。この記事はメアリやパーシーの伝記的背景や散文作品を織り交ぜて創作された虚実ないまぜの短い書き物であり、チャールズ・E・ロビンソン (Charles E. Robinson) は「物語評論 (narrative essay)」と注釈を付けている (375n)。本文冒頭に出てくるテムズ川の描写は、メアリの短編「18世紀物語—断章 (Eighteenth-Century Tale: A Fragment)」冒頭1段落めから取られたものであり (345)、エドモンド・スペンサー (Edmund Spenser) による「ローマの廃墟 (Ruins of Rome)」からの詩行が本文で引用されているが、これは1819年3月にメアリがローマのコロセウムを訪れた際においてもジャーナルでも引用されている (*MSJ*, 251)。また、語り手にイタリアの魅力を語って聞かせるエドモンド・マルヴィル (Edmund Malville) の経験談は、メアリ自身の体験によるものである。なかでも18××年9月15日、ピサ (Pisa) の温泉地からヴィコピサーノ (Vico Pisano) へ向かうくだりのエピソードは、シェリー一行が1821年9月15日にエドワード・ウィリアムズ (Edward Williams) およびジェーン・ウィリアムズ (Jane Williams) を同伴してたどった道程と一致している (*MSJ*, 380)。本文では、ピサからの帰途において、マルヴィルにその風景のすばらしさを滔々と語る「亡き親友」が登場するが、この親友はパーシーをモデルにしたものである。この親友が語る風景描写は、パーシーの作品「雑多な主題を扱う断片 ("Miscellaneous Fragments")」第38セクションによるものである (Shelley, *Relics of Shelley* 89-90)。

3. テクストの翻訳

真夏の長雨が3週間経ってようやくあがると、太陽がヘンリーオンテムズの町を照りつけた¹。雨が上がった直後、道は泥にまみれ草は濡れそぼって、木々からは水が滴っていた。しかし、晴れ渡った日が2日も続くと、2日目の午後からはのどかな気候になった。木陰に腰を下ろしたり、草の上に寝転んだりもできて、暑くも寒くもないようなちょうど良い天候だったと言って差し支えない。こんな日は滅多にないので、大いに関心をそそられた。われわれイングランド人は大抵、四方壁に囲まれて自分の寝室に3か月も閉じ込められようものなら、病人が外気にあたりたくて戸外へ飛び出していくような、そんな気分になる。仮に「1オンスの甘味が1ポンドの酸味に優さる」ならば、われわれは<南の子どもたち>よりも大いに幸運である²。向こうでは長い夏の間、太陽の日差しに浸り、われわれのように、来る週も来る週も白い天井にカーベットの敷いてある部屋に監禁状態になった後、十分に水を与えられて育った木が豊かに茂らせる群葉を頭上にして小川のへりに腰を下ろすことを無上の喜びとする、そんな気持ちを抱くことはまずないからだ。

太陽がヘンリーオンテムズの町を照りつけた。住人は互いに顔を合わせ、「何とも気持ちの良い天気ですな。雨の降らない日が2日も続くとはね。月がこのまま月曜日まで変わらなければ、まる1週間はからっと晴れることになりますぞ!」と興奮気味に言った。こうして、住人はお互いに晴れた日が運良く続いてよかったと言い合い、私も同じ考えだったのでウェルギリウスの牧歌をポケットに携えて散歩に出かけ、天がもたらしてくれた最良の贈り物、すなわち雲ひとつない穏やかな一日を過ごした³。田園広がるヘンリー周辺には香しい空気があたり一面に漂い、その空気は私の心に恍惚とした感情を生み出したが、この田園風景はそんな感情も最も穏やかなものへと調節してくれるようになっていた。テムズ川は草の生えた斜面を音もなく流れていき、その川岸はブナの木陰で覆われたかと思うと太陽のざらつく光に一面さらされたりした。足の向

くままに行くとその方角に近いところで、美しい中洲がいくつか川中に出来上がっていて、そこには柳やポプラ、榆の木が点在していた。その中洲に根を下ろしている木々が、安定した岸から出ている枝と一体になって緑のアーチ道を作り出し、たくさんの鳥たちがいそいそと常連で集う場所を作り出している。そして、高貴な方が住まう邸宅の大庭園に足を踏み入れると、草は青々として瑞々しいばかりだった。草は少し前に刈り取られたものの、また生えてきて、バドルール・ブドゥール姫がアラジンの宮殿に歩いていったときに身に着けていたピロードよりも柔らかかった⁴。川のそばには立派な桎が立っていて、私は根もとに腰を下ろして本を取り出すと、シレノスを詠った牧歌を読み始めた⁵。

近くで誰かがため息をついた。私の注意は自然とそちらに向いた。このような時に苦痛の思いがかくも人間の胸に巣くうものだろうか。しかし見上げると、それは歓喜から出たため息であって悲しみによるものではないと判明した。ある感情から生まれたため息ではあった。だが、その感情は表現する言葉を探しあぐね、ため息ひとつの中に燃える精神を包みこんだのだった。傍らに立っている人物を私はよく知っていた。名はエドモンド・マルヴィルといい、魂の若々しさはそのままに、定められた人生行路の半分以上も経験してきた人である。マルヴィルは青白い顔をして、穏やかなときには物憂げにさえ見えた。だが、そんなマルヴィルがいざ微笑みを浮かべると、口の端では楽園への扉が開かれているかのように思われた。また、話をすればマルヴィルの暗青色の目が輝き、円やかな声音がそこに帯びる感情の重みで震えるのだった。そして、マルヴィルのほっそりとして小柄な風采は—こんな表現をしてしまうならば—空靈的な本質を帯びてくるように思われて、天へと瞬く間にすりと昇っていくのを阻む土くれでできているようにはもうほとんど見えなかった。その穏やかな顔にはふさふさとした黒い巻き毛がかかっていた。

私が崇拝し、言いようもないほど心を寄せた人物、エドモンド・マルヴィルの容貌はこのようなものであった。マルヴィルは私の傍らに腰を下ろし、ふたりで天気のことや眼前の川のこと、はたまたパリーの航海やギリシア革命のこ

とを話題にした⁶。しかし、私たちの中で交わされる言葉も次第に少なくなり、ついにはふたりとも口をつぐんでしまった。太陽が傾いた。櫓が地面にまだらに落とした影の動きも、櫓が地面に垂れ下がったり身を起こしたりするに従って、微風でかき乱された。燕は通り過ぎていき、川の上を飛んでいくとき翼でそっと水を切った。愛と生の精神がこの雰囲気に行き渡り、背の高い草をその存在の下で震わせているかのように思われた。このような事柄一切が鎖の輪を編み上げていき、静寂のうちに私たちの思考をつなぎ留めた。

様々な考えが頭の中を浮かんでは消え浮かんでは消えていった。そしてついに、私はどういうわけか、どういう意図があったのかは記憶にないが、語気を強めてこんなことを言ってしまった。「少なくとも、このきれいな川は泥だらけのアルノ川よりはましですね」⁷。

マルヴィルは微笑みを浮かべた。私は自分が口にしたことを後悔した。というのも、マルヴィルは大のイタリア好きだったからだ。イタリアの国、イタリアのすべてを一風変わった感情で好んでいた。しかし、考えを口に出してしまったからには、私はその考えに対して裏付けを与えなければならない気がしてこう続けた。「ねえ、私だってアルノ川を自分の目で見てきたので判定をくだす権利はありますよ。イタリア以上に失望を感じた場所は間違いなく他にありません。少なくとも全体的に見てね。むさくるしい住宅、黄ばんだアルノ川、刈り込まれた木々に不格好な彫像なんかを飾った庭の趣味の悪さ、息苦しくて気分が悪くなるようなシロッコ、ほこりっぽい道、やたら広くて野暮ったい川をゆく数隻のフェリー、川の流れから突き出た石と石の上に掛けられた橋、ぬかるんだブレンタ川（ロンドンのニューリバー運河なんてブレンタと比べればオルノーコのようなものです）⁸。そしてヴェニスときたら至る所からスキラ岩と大渦巻のカリュプデイスを見ることができるけれども、清掃されていない運河と狭い小道が目立っているばかりで、屋台で出される魚とあぶったカボチャに耐えなければなりません⁹。その匂いだって…」。

「やめてくれ、イタリアを冒涇するようなことは！」マルヴィルは、半ば怒

り半ば笑いながら大声をあげ、「ブレンタ川は仕方がない。だが、ヴェニス。海の女王であり、ゴンドラとロマンス文学の町なんだぞ…。」と言った。

「あんな排水溝の上でロマンス文学？」

「そうとも、ロマンスさ！純粋で魂を高めてくれるロマンス文学だよ。君は、フシナから初めて見た壮観な街の風景を覚えていないか。そこにはキュベレの王冠を載せたような海があったよな¹⁰。僕は息もつけないほど興奮して運河を通ったときのことをよく覚えているよ。それと全く同じ水路を、恐れを知らぬデズデモーナや、情の深いムーア人、はたまた心優しいベルヴィデラや勇猛果敢なピエールの乗ったゴンドラが私よりもずっと前にたどったのだからね¹¹。兩岸に密集する館にそういった人たちが今もなお住んでいるような気がして、黒っぽくて謎めいたゴンドラがそばを過ぎていく度に、彼らがそっと近くを通っていく様を想像した。毎晩オペラから帰る際に、君が排水溝と呼ぶものを舟で通って、ささやかな旅をした。そうしながら僕は周囲で見るもの聞くものをどれほど深く記憶に植え付けてきたかことか。まさにクレオパトラがアントニーのもとへ向かう際に乗った船にも匹敵するほどの、豪華な帆船に腰を下ろしていると、一切合切が結びついてひとつになり、ロマンス文学の世界にいるような気持ちを高めてくれたんだ。黒い家々が影を落とした薄暗い運河、オールが物憂げに水をかいてしぶきのあがる音、呼び声、いや、僕たちが曲がり角に来たときに他の帆掛け船にけんかを売るように、(楽しげだが意味は不明な)「Ca Stali」と船頭が単調に繰り返している掛け声、死に神のように真っ黒で静かなゴンドラが他にも通り過ぎていく様—こういったことがロマンス文学風じゃないのか¹²？それから僕たちはサンマルコ大聖堂前の広々とした一角に出て行った¹³。サンタ・マリア・デラ・サルーテ聖堂のクーボラが月光に照らされて銀色に光っていたよ。静寂のうちに威厳を保ちながら黒い塔がそびえ、水はさざ波を立てていた¹⁴。リドの埃っぽい道は通行の無事を保証するものだったじゃないか¹⁵。大運河からそびえ立つパラディオ式の宮殿、弓形部分をひとつにしたリアルト橋の飾らない美しさ—」¹⁶。

「ひどい場所ですよ！私はそこを渡ったときのことを忘れられないのですから」。

「ああ、それが世の中に対する君の捉え方なのだろう。しかし、ロマンスを愛好する人たちのうち誰がリアルト橋なんぞへ行こうと考えるだろうか？あそこで魚市場が開かれていると聞き及んでいるのならなおさら。大御所のご意見に従えば、間違いなくヴェニスに匹敵する場所はない。「この新しい世界という虚飾の光景」から立ち退こうと切に願って、休みなく想像力を働かせている人たちに、「地元に住む権利と名声」を与えてくれるのだから¹⁷。そんな人たちがまさに切望しているのは、実在の賢者や、人間の精神世界だけで生きている英雄が住処としていた古い世界なんだよ。そんなことを幾度となく自分に言って聞かせ、僕は遠くをゆくゴンドラのぼんやりとした光を目にしたり、建物の窓下を船頭が通り過ぎていく際に繰り返す掛け声を耳にしながら、夜長を過ごした。ヴェニスはなんと静かなんだろう！馬の蹄の音もせず、町の不愉快な雑音もない。路地については仕方がない。一だが、どうしてすべての町に通じるものを論じなければならない？汚い裏通り、邪魔くさい市場の女性たち、海辺の町ならではの目印、運の悪い魚の臭気なんかを？どうして欠点だけをよせ集めて、この町独自の良さを説明しないままにってしまうんだ？波間からそびえ立つ建物、水をたっぷり含んだ石畳の静けさ、黒いゴンドラの神秘的な美しさ。それに忘れちゃいけないのは、＜小型船＞からちょっと顔を覗かせた女性たちの黒い瞳と優美な形をした眉¹⁸。君がイタリアにいたのは3か月かい？」

「こういっては何ですが、6か月です。マルヴィルさん」。

「まあ、6か月であろうと、12か月であろうと、20か月であろうと、イタリアを堪能できるほどの経験値を得るには不十分だ。われわれは神がご存じのこと、すなわちオレンジの森や不凋花の咲く野原を勘違いしたまま、歩んでいる。ないものねだりだからこそ、現実には失望してしまうんだ。僕の心にとって現実が、これまで想像力で思い描いた魅力あふれる光景に劣ることはない」。

「言うなればそれは、華麗な色付けにはほぼ値しない事柄を想像力が彩るから、その仕事ぶりにほれ込んでしまえる、ということでしょうか？」

「君が」とマルヴィルは微笑みを浮かべて言った。「イタリアでどんな風に過ごしたかを言ってやろうか？ 大方、四軽馬車に乗って、御者とひどい宿に悪態をつきながらイタリアを横断したのだろう。町に着けば最上のホテルに向かい、そこでたくさんの同邦を目にして、異国の地で心の友に会ったとばかりに挨拶をする。イングランドに戻れば単なる知り合い程度にすぎない相手だけでもね。そして朝になれば、フィレンツエ中の通りに面した華麗な聖堂や巨石建築の廃墟を見ようと歩き回る。欠損したとある柱のところにやって来て、何だろうかと考えあぐねた挙句、物知り顔の同邦が今までに見に来た遺跡のひとつかもしれないと考えてはみるものの、すぐそれを笑い飛ばす。喫茶店で徒然なる時を過ごしてガリニャーニ紙に目を通す。それからおそらく美術館にも同じく無関心のままぶらぶら歩いていくのだろう。もしそこで君が無上の喜びに浸ることがなかったなら、僕は君からの弁解をこれ以上受け付けろ気はないからな」。

「私の弁解ですって？」

「君は食事をして<おしゃべり>にも加わったんだよ¹⁹。君の言うことは理解してもらえなかったし、向こうの言うことも理解することができなかったけどね。オペラに出かけて、だれも聞いてないような楽曲52番の反復奏を聴いたんだろう。もしくはイングランド大使の居間を楽園のように感じてグローブナー広場にでもいるような心地になったんだろうな²⁰。僕は自然が大好きだ。町や色々なものが入り交じった社会の些事に関わるのは、僕の性質とはそぐわない生活スタイルなんだよ。自分とその思いに対して嘘をつかずに生きているから、僕は退屈な慣例には関与しない。もっともこの慣例によって日課が作り上げられ、ほとんどの人はそれを生活の中でこなしているんだけどね。若い時にイタリアに渡り、熱烈な好奇心と喜びの気持ちを抱いて、その国にある偉大で栄えあるものを見物したよ。ヴェニスに僕に見せつけた魅力のことはすで

に言ったね。ロンバルディアの景観はイタリア南部のとは全く異なるけど、本質的にすばらしいものだ²¹。北部の湖に行けば、高地の風景を味わうことになり、それは南部よりもこんもりと生い茂った草木と混ざり合っている。なかでもエウガネイ丘陵はより穏やかな美しさを備えていて、それを目にしたらわが国にあるどこかの丘を思い出す²²。ただし、わが国のはもっと暖かな色合いをしているけどね。こういったことをウーゴ・フォスコロが「ジャコポ・オルティスの最後の手紙」で描写しているから読んでみるよ²³。そうしたら君もイタリアの自然を見て、ロマンチックで崇高な思いにとらわれるのがわかるだろうよ。ところで、ナポリはイタリアの中でも魔性の女だね。風景はえも言われぬ美しさを放ち、古代の遺物は非の打ちどころがなく、実にすばらしく立派だ。気候は非常に快適だから、祝日のような空気がいつもナポリにはあるようにも思われる。ただ、そこには不安感が不思議なほど入り混じっている。なぜなら人はベスビオ山を見れば不安感を抱かずにはいられないし、極端な変化をはっきりと示す兆候に至る所で見ると不安感が掻き立てられてしまうからだ。しかも、他の国だったら最大限に信頼できる、善良なく母なる大地>の至る所で、そういう変化が起きてきたんだよ。まさにこのご婦人は家庭的な奥様だ。家事を切り盛りして、根を詰めながら財布の口を締めて家族を養っている。何の喜びも楽しみも求めていない。ナポリだったら、僕の知ってるこのご婦人は贅沢な装いでめかしこんで、自分を忠実にエスコートしてくれる<太陽>にいつも気を配りながら上機嫌だったよ。しかもあの人の微笑み方があまりに優美なものだから、僕たちはあだっばいことをされて放っておかれても許してしまうんだ。ローマだって今も世界の女王じゃないか。

アテネ人がこれまで生み出してきた知恵あるものすべてが
 アフリカ人がこれまで生み出してきた風変わりなものすべてが
 アジアがこれまでこれまで保持してきた戦利品のすべてが
 ここで見るができる。—おお、なんとも驚くべき変容！

生きたローマは世界にひとつだけの装飾品であり

死んだローマは世界にひとつだけの記念碑である²⁴。

「もしこれが本当なら、僕たちのご先祖は自分たちが死んだときに実に珍しい霊廟を持っていることになるぞ。アルテミシア2世が夫のために贅を凝らした納骨堂を建てたよりも、やもめとなった＜時間＞が亡き連れ合い、＜過去＞に捧げたものの方がはるかに大きい²⁵。僕が死んだらそこに眠ってローマの栄光ある塵と混ざることになるんだ！どうか、そこの燦然たる空気が僕の生気を失った肢体をすっぱりくるみ、消えゆく僕から花が生まれ、その花が最も輝かしい空気を吸い込みますように。

こんなふうには僕はあの美しい国を旅した。そして今、君にトスカーナの話をしているんだ。やはりイタリア南部が楽しいと言ってしまうな。僕だったら住むのにはトスカーナを選ぶだろう。そこの住人たちは礼儀正しいし、洗練されている。実のところ庶民や召使いの物腰にも魅力がある。おそらく、このことは、ある部分においては我が国の人々の態度とは正反対だと考えられたりするだろう。日常生活からその着慣れた衣装を剥ぎ取ってしまうと、見慣れないものがごとく、お祭り騒ぎのような風情を日常に与えてしまう。あの国の善良な人々は礼儀正しい。しかし、こういった人々こそが、敬意と追従の区別や、気やすさと無作法の区別をしていて、その裏には多くの辛辣さがあるのだ。だが、このような側面を僕たちイングランド人がやって来て評価することはほとんどない。とある階級に属する同邦のご婦人が心底衝撃を受けたのを、僕は実際に目にすることがある。その人は、自分の雇っていた女中との別れ際、彼女から心を込めたハグをされたんだよ。あるいは、イングランド人男性が自分は侮辱されたと思った例もある。その人は自分の御者に、次の命令までしばらく待てと言ったが、その御者がそう言われてすぐ運転席に静かに腰を下ろしたからだ。だがいずれの行動も、ごくわずかの傲慢な心にそそのかされたものではない。なぜかはわからないが、主人と召使いの間で毎晩交わされる挨拶には、

いつも心の琴線に触れるものがあるのだ。召使いは明かりを持っていくといつも「神のご加護がありますように、旦那様」と言い、主人からも同じような祝福の言葉が返ってくる。そんなの大した意味はない、と君は言うだろう。だが、そんなたいした意味のないことこそが僕の心をときめかせてくれたんだよ。もっと多くの時間を占める他の出来事なんかよりもね。

トスカーナの田舎は開墾された土地だし、土壤も肥えている。もっとも、南で見るような、度の過ぎた贅沢さと同類のものは見られないけれど。半ば忘れかけられていた例え方をするなら、この大地は愛情深く年端の行かない妻のようなものだ。家庭を愛し、目を細めて家の手入れをする。春になれば、自然は美をまとって牢から姿を現し、大地に太陽の光と生命を浴びせる。そのうち夏が緑の衣装をこらしてやってきて、農民に労働と報酬を与える。農民が刈り取る豊潤な収穫、ウェルギリウスに詠われるような脱穀場、せわしく働くことへの幸福感の表れ。こういったことを目にすると僕は嬉しくなる。夜のかぐわしい空気、日の光で燃えるように輝く宮殿にいる宵の明星、花を星のようにちりばめた地面、きらきらと照り映える流れ、熟したブドウ、クリの雑木林、カッコウとナイティンゲール。こういったものが僕には、他の人にとっての舞踏会やパーティーと同じなんだ。もしも嵐が、この国を襲撃する武装した一隊のように押し寄せ、激流を満たし、木々の高慢な頭を曲げ、雲の耳をつんざくような音楽を鳴り響かせて、稲妻があたり一面の空気を壮大さで満たすなら—そんなことがあるなら、僕は今でもその光景に目を奪われてしまうだろう。イタリアは単調な青空だと言われているのを耳にしたことがあるけれど、そこに変化を与えてくれる光景だからね。

トスカーナは、川が清らかで水を湛えている。平野は波打つ麦で飾られていて、木々や垣根に絡ませた蔓で影ができる。山々は背後にある森の威厳を保ちながら出現して、その光景に気高さを添えている。山のない土地に何の価値があるだろうか？天は平野を侮る。だが、美しい大地が誇り高い頭をあげて天との交わりを求めたら、天は大地と相見えるために降臨し、一帯を雲で飾り、燦

然とした色合いをまとわせる。

18××年9月15日、ピサの温泉地からヴィコピサーノへ向かう道中、愉快な一団に加わっていたのを覚えている。ヴィコピサーノは小さな町で、昔はピサ領とフィレンツェ領の国境にある要塞都市だった。喜びを吹き込んでくれる空気、そして自分の感じた喜びが愛する仲間たちの表情にも表れているのを僕は見て取った。僕たちが進んでいった道は、山と呼ぶほどではない高さの丘のふもとにあったが、その丘は絵画のように美しく形作られ、いくつかの森で覆われていた。セミは甲高い声で話し、空気は花の香りを含んでいた。僕たちはくくるみの岩山>を通り、丘のふもとをさらに進んでいくと、そのあたりでは最端に造られたヴィコピサーノにたどり着いた²⁶。家々は古びていて旧式の塔が載っていた。町の端には、雑草の生い茂った古い壁がつらなっていた。だが、時と季節がこの廃墟に施してきた色合い以上に、豊かで不可思議なものを目にしたことはなかった。軒蛇腹の並びが下方へとずっと続いていて、それが影を落とすことで、僕たちの目にした色彩をもっと多様なものにしていった。僕たちは同じ道を折り返した。ヴィコピサーノからほど遠くないところから緩やかな丘を登って行くと、頂には聖母に捧げられた教会があつてその前は草の生えた台地になっていた。ここで僕たちは田舎らしい素朴な食事を広げてとった。教会に付属する小さな家には農家の女たちが住んでいて、食事を出してくれたのだ。女たちのうちのひとは際立って美しく、身のこなしの優雅さや物腰の素朴さがその美をより引き立てていた。ピクニックを終えると僕たちは丘の頂上にある教会の日陰で一息入れた。僕たちは有頂天になって丘の頂上から見える光景に目を凝らした。『おい、ほら！』と僕の亡き親友は声を上げた。『深淵で合流する波のように、山々が平野へ裾野を拡げていく様を見ろよ。オリーブの木は海のように青々して風になびいている。雲は丘のふもとへ、まだらに影を落としている。鷺は僕たちの頭上を翔び、蝶はひらひらと近くを舞う。そこかしこで松は風にやさしく間伸びした返答をする。銀梅花の茂みは芽ぶき、僕の足下は芳香を放つ花々で一面覆われている。』僕は感無量になって、ただ、た

め息をつくだけだった。親友ひとりが饒舌で自分の考えを言葉でくるんでいたんだ」。

マルヴィルは話をしながら目を輝かせ、深く吐息をついた。そして体の向きを変えると、私たちのきた辺りから続いている通りに向かって歩いて行った。私は後に続いたが、ふたりとも口をつぐんだままだった。ようやくマルヴィルが再び口を開いたときには、イタリアのことには触れなかった。どうやらマルヴィルは思考の流れを変えたいと思っていたらしく、少しずつ落ち着きを取り戻していった。

マルヴィルにいとまごいをする段になって、私は口の端をあげてこう言った。「マルヴィルさんは、イタリアの楽しい集いを持てはやしてくれましたね。私からはイングランドで集うことをご提案させていただいても構いませんか？ 次の木曜日、友人を誘って一緒にテムズ川で舟遊びをするのはどうでしょう？ 美しい川岸や川の流れそのものを見れば、もっと心地良かった気候の中でマルヴィルさんが感じた喜びを幾分かでも感じられるのでは、と思いますよ。」

マルヴィルは反対しなかった。だが、自分の誘いが招いた結末を、思い切って語る勇気が私にはあるだろうか？ 木曜日はやってきたが、空は雲に覆われていた。雨の降りそうな雲行きであった。それでも私たちは果敢にも舟で乗り出したが、一時間もしないうちから、しっとりとした小糠雨が降り始めた。私たちは帆を雨除けにして、海軍用の黒いマントや肩掛けで体をくるんだ。「これじゃ全然だめだ。」誰かがため息をつきながら声を荒らげた。「すぐに止むさ。」と別の誰かは自暴自棄な声になった。誰も何も言わない間があった。「この端のところで僕の雨除けの場所を作ってくれるかな？ 肩が濡れてきているんだ。」と誰かが言った。5分ほどしてもうひとりが言うには、雨水が自分の首にぽたぽた落ちてきているとのことだった。けれども私たちは先を進んだ。雨は数分間止んだので、水の滴る木々のもとに小さな入り江を見つけ、そこにボートをつなぎ留めた。私たちは軽食をとり、ワインで気持ちを盛り上げたので、ゆっくりと帰航する道すがらも大雨に伴われたが、その雨を、不屈の精神で乗

り切ることができたのだった。

注

- ¹ ヘンリーオンテムズ (Henley upon Thames) : イングランド、オクスフォードシャー州南東部に位置し、テムズ川に臨む町。
- ² オンスとポンド (ounce / pound) : いずれも重量の単位。1 オンス = 1 / 16ポンド、1 ポンド = 0.4536kg。
- ³ ウェルギリウス (Virgil) : ローマの詩人 (紀元前70年～19年)。
- ⁴ バドルール・ブドウール姫 (Princess Badroulboudour) : 『アラビアン・ナイト』中の「アラジンと魔法のランプ」でアラジンが恋に落ちて求愛した姫。
- ⁵ シレノスを詠った牧歌 (the Eclogue of Silenus) : シレノスはギリシア神話では酒神バッカス (Bacchus) の養父であり、森の精サチュロス (satyrs) らの長である。ウェルギリウスの『牧歌』第6歌でシレノスのエピソードがある。
- ⁶ パリーの航海やギリシア革命 (Parry's voyage and Greek revolution) : パリー (Sir William Edward Parry) はイギリスの北極探検家 (1790年～1855年)。ギリシア革命はギリシア独立戦争のことを指す。この独立戦争でギリシアはオスマントルコから独立を勝ち取った (1821年～29年)。
- ⁷ アルノ川 (the Arno) : イタリア中部の川。アペニン山脈から発しフィレンツェ市内を流れてリグリア海に注ぐ。
- ⁸ シロッコとブレンタ川 (scirocco / the Brenta)、ロンドンのニューリバー運河とオルノーコ (the New River Cut / Oronooko) : シロッコは北アフリカから南ヨーロッパに吹く熱風。ブレンタ川はイタリア北東部、ヴェネスの州都ヴェネト (Veneto) を流れる川。ロンドンのニューリバー運河は1613年に完成した送水路。オルノーコはアフラ・ベーン (Aphra Behn) による小説「オルノーコ (Ornooko)」の主人公オルノーコを指す。ただし原典では Oronooko としている。スベルミスか。ニューリバー運河は、アフリカ王家の血筋を引きながら奴隷に身を落としたオルノーコに喩えられ、ブレンタ川に比べると、まだ気品がある、といったところだろうか。
- ⁹ スキラ岩とカリュプデイス (Scylla and Charybdis) : スキラ岩はイタリア本土とシチリア島の間にあるメッシーナ (Messina) 海峡にある危険な岩礁のこと。カリュプデイスはこのメッシーナ海峡で発生する大渦巻のこと。
- ¹⁰ フシナとキュベレの王冠 (Fusina / Cybele's diadem) : フシナはヴェネスの一地区で、ブレンタ川の古い入り江の河口に位置する。キュベレはフリギア (小アジア

アの中央および北西部にまたがる古代国家)の大地母神で、穀物の実りと多産を象徴する。

- ¹¹ デズデモナー (Desdemona)、情の深いムーア人 (the loving Moor)、ベルヴィデラ (Belvidera)、ピエール (Pierre) : デズデモナーはシェイクスピア (Shakespeare) 作悲劇『オセロ (Othello)』(1604年)に登場する、主人公の若妻。また、『オセロ』の主人公オセロはムーア人のヴェニス将軍である。ムーア人とはアフリカ系イスラム教徒で、アフリカ北部に住むベルベル族とアラブ人の混血。ベルヴィデラ (Belvidera) 及びピエール (Pierre) はトマス・オトウェイ (Thomas Otway) 作の悲劇『護られたヴェニス (Venice Preserv'd)』(1682年)出てくる登場人物。『オセロ』も『護られたヴェニス』もヴェニスを舞台としている作品である。
- ¹² Ca Stali : Cast Ali のことだと Robinson は注釈を付けているが、依然として意味は不明である (Robinson 376n)。
- ¹³ サンマルコ大聖堂前の広々とした一角 (the wide expanse before the Palace of St. Mark) : ヴェニスにあるサンマルコ大聖堂 (11世紀建立) の正面に広がる広場。
- ¹⁴ サンタ・マリア・デラ・サルUTE聖堂 (Santa Maria de la Salute) : ヴェニスの大運河入口に建つ聖堂。ペスト大流行の後、健康の聖母であるサンタ・マリア・デラ・サルUTEに捧げられた。
- ¹⁵ リド (Lido) : イタリア北東部、ヴェネツィア・ラグーン (Lagoon of Venice) とヴェニス湾を隔てる砂州島のこと。
- ¹⁶ 大運河とリアルト橋 (Canale Grande / the Rialto) : 大運河はイタリアのヴェニスにある運河のひとつ。同市の幹線水上交通路。リアルト橋は、大運河に架り、リアルト島とサンマルコ島を結ぶ、大理石のアーチ橋。リアルトはイタリアのヴェニスにある二大島のひとつで商業中心地区。
- ¹⁷ 「この新しい世界という虚飾の光景 (the 'painted scene of this new world')」と「地元に住む権利と名声 ('a local habitation and a name')」: 「この新しい世界の空虚な光景」は P. B. シェリーの詩劇『チェンチー族 (The Cenci)』第5幕第1場78行目、「地元に住む権利と名声」はシェイクスピアの『真夏の夜の夢 (A Midsummer Night's Dream)』第5幕第1場17行目からの引用。
- ¹⁸ 小型船 (faziolos) : faşelo, faşello のことを指す
- ¹⁹ おしゃべり (conversazione) : conversazione のことを指す。
- ²⁰ グローブナー広場 (Grosvenor-square) : ロンドンのメイフェア (Mayfair) 地区にある広場。
- ²¹ ロンバルディア (Lombardy) : イタリア北西部の州。
- ²² エウガネイ丘陵 (the Euganean hills) : イタリアのヴェネト州南西部、パドヴァ

西に位置する丘陵地帯。標高は600メートル。

²³ ウーゴ・フォスコロ (Ugo Foscolo) : イタリアの詩人 (1778年～1827年)。

²⁴ エドモンド・スペンサー (Edmund Spenser) の「ローマの廃墟 (Ruins of Rome)」より引用。

²⁵ アルテミシア 2 世 (Artemisia) : トルコ南東部のカリア (Caria) の女王 (在位は紀元前352-350年)。兄であり夫であったマウソロス (Mausolus) を記念する霊廟をハルカナソッス (Halicarnassus) に建造し、「世界の七不思議」のひとつとされている。

²⁶ くるみの岩山 : メアリは Rupe de Noce としている。

* 翻訳の底本としては以下の参考文献に記載の第一次文献を用いた。なお、作品執筆の背景についても同様に以下の文献を参考にした。

参考文献

Shelley, Mary. *The Journals of Mary Shelley 1814-1844*. Eds. Paula R. Feldman and Dianas Scott-Kilvert. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1987.

---. *The Letters of Mary Wollstonecraft Shelley*. Ed. Betty T. Bennett. Vol. 1. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1980.

---. "Recollections of Italy" *Mary Shelley: Collected Tales and Stories with Original Engravings*. Ed. Charles E. Robinson. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1976. 24-31.

---. "An Eighteenth-Century Tale" *Mary Shelley: Collected Tales and Stories with Original Engravings*. Ed. Charles E. Robinson. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1976. 345-46.

Shelley, Percy Bysshe. *Relics of Shelley*. London: Moxon, 1862.